

人材力と技術力で電子出版の要望にも対応 エコーインテック(株)

<http://www.echointek.com/>

中国へのアウトソーシングを早くから積極的に押し進めるとともに、こまやかな人材育成と果敢な技術革新で業績を伸ばしてきたエコーインテック株式会社。電子書籍時代の備えも万端という同社の強さの源泉を探る。

取材・文◎編集部

世界の主要IT関連企業が多く集まる中国遼寧省大連市



電子書籍ビジネスもグローバル化は必然

「中国」といえば、まず思い浮かぶのが「安い労働力」と「巨大な市場」。歴史低賃や業績不振を打開する特長と、とばかりに発展中が、そのコストメリットやスケールメリットに熱い関心を注いでいる。

日本語の書籍をデジタル形式で読者に提供するという、一見、国内産業的に見える電子書籍ビジネスも、やはりそうした動きと無縁ではない。紙媒体や紙版データのかたちで蓄積されてきた印刷物を電子書籍化するにあたっては、スキャニング、文字入力、フォーマット変換、タグ付け、校正、検証といった数多作業

が多かれ少なかれ発生し、そのコストを低く抑えようとするれば当然、アウトソーシングという選択肢が浮上してきている。

電子書籍の市場も、決して国内のみとはかぎらない。アジアの国々に行きよって少し大規模の書店を覗いてみれば、日本のマンガ、小説、旅行記、ファッション誌などが翻訳されて並んでいる。電子書籍のストアがグローバルに広がれば、海外コンテンツに対する日本国内の需要も一気に増すだろう。

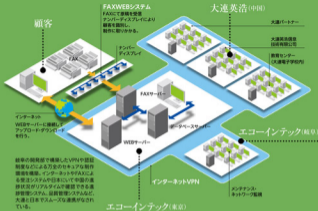
そんななかで、いち早く中国との密接な関係を構築し、アウトソーシングによるシステム開発やDTP制作のスキルを蓄積し続けてきた結果として、知らずとも、そのグローバ

ルな電子書籍ビジネスの最前線ともいえる位置に制社会社として立っているのが、エコーインテックである。

DTP制作のワークフローにシステム開発のノウハウを活用

エコーインテックは、岐阜の情報システム会社のティ・アイ・エス(2009年にエコーインテックと合併)を母体とし、そのオファショア開発部門の日本創設会社として2002年に発足。翌2003年には、中国の大連市に100%子会社「大連英浩(大連英浩信息技术有限公司)」(以降「大連英浩」と略)を設立して、独自のアウトソーシング拠点を構築した。当時、中国へのアウトソーシング

日本と中国の業務を一体化する基盤システム



従来の開発で構築したVPNや認証制度などによる万全のセキュリティ確保を確保、インターネットやFAXによる受信システムや日本にて中国の業務状況がリアルタイムで確認できる業務管理システム、業務管理システムなど、大連と日本でスムーズな連携がなされている。

エコーインテック(東京)

は、データ入力、切り抜き、トレース、脚取りの作成といった比較的単純な作業が大半を占める。エコーインテックもこの脚取りの作成を足踏かりにDTPの分野へと第一歩を踏み出す。ただしその際、労働力の安さに任せて失敗できなかったのは、専用のシステムを開発し、トラブルの低減や納期の短縮に努めたという。「FAXWEB」と名付けられたこのシステムでは、開発国の原稿を開発部門の日本創設会社で所定の場所にアップロードすると、同時に、FAX番号から割り出した発注者へは受発メールを、大連英浩の制作部へは受発メールを送信する。その後、脚取りが完成して大連英浩から所定の印刷にアップロー

ドされると、今度はそれを納品先のサーバーへと転送し、発注者へは完成通知メールを送信する。こうした自動化に加え、日本語のできないオペレーターでも日本語で発注者への問い合わせや依頼のメールを送るという、十数種類の定型文による自動返信の仕組みなどを講じた結果、ミスやトラブルは激減。現在では24時間365日の受注で月量3万件というスループットを実現している。

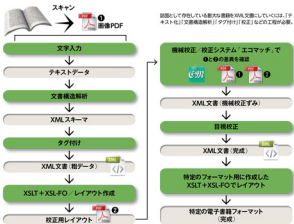
高い日本語力ができる 正確かつ迅速な日本語組版

脚取りの作成のビジネスを軌道に乗せたエコーインテックは、組版の

分野へとさらに歩を進める。しかし、日本語を組むからには、組版自体の技術に加え、日本語を正しく理解する力を備えていなければならない。

そこで同社では、日本語能力試験の上級合格者を中心に、日本語に堪能な人材を積極的に採用してスタッフを構成。そのなかでも特に優秀で、特に、事業の中核を担うような人材には、数ヶ月～1年にわたる長期出張・転勤という形で東京や岐阜で研修を行っている。日本語を扱う仕事なのだから、日本の文化や習慣を身につけるのは当然だという。さらに営業マンに同行させ、クライアントからの要求やクレーム処理など、日本での印刷販売ビジネスの実態までを、実際に学ばせている。

電子書籍データ制作のワークフロー



紙原稿のXMLデータ化からXSL-FOによる自動組版まで

レイアウトソフトを使った、いわゆる手組みの組版に加えて、エコーインテックでは2005年から、XMLベースの組版にも取り組んでいる。もともと未知の分野だったが、大手出版社から依頼を受け、大連英語内に専門のチームを編成。出版社の指導のもと、日本語の文章解析からタグ付けまでのワークフローを知識間で確立した。学習辞書やレシピ本、新書など、すでに多くの実績を積んでいる。

紙原稿のXMLデータ化では、提供している専門の人力会社で、3組ペリファイ方式による文字入力で正

字率99.997%という高い精度のテキストデータを作成し、それを大連英語で構造解析してタグ付けする。XSLT/XSL-FOによる組版は、スタイルシートの設計から対応可能だ。ちなみに、XSLT/XSL-FOでXMLスタイルシートによる組版の場合も、手組みによる組版の場合も、自社開発オリジナル校正システム「エコマッチ」による差異検証ワークフローの要所箇所に関与し、適切な品質管理を徹底している。

電子書籍は、文書フォーマットに関連してもビューアプラットフォームに関してもまだまだ未知数の部分が多いので、恐らく当面は複数のフォーマットやプラットフォームが併存し、それぞれが技術の革新や

メーカー間の力争などに応じて改良・拡張を繰り返していくだろう。だからこそ、電子書籍の文書データは特定のフォーマットやプラットフォームに依存しないかたちで、純粋に文章構造のみを示すXML文書しておく必要がある。現在、紙本や文書の電子化を急いでいる企業から受注が相次いでいるという。

人材は会社の宝 人材こそがすべて

こうして次々と新たな分野に挑戦しながら実績を伸ばしてきたエコーインテック。その成功の鍵は何なのか。「中国でビジネスを成功させるには？」との問いに、代表取締役社長

自社開発オリジナル校正システム「Echo Match(エコマッチ)」

「エコマッチ」は、作業前のPDFと作業後のPDFを比較して異時点での差異を指摘し、異点を合わせて表示させるブルーシステム。電子書籍の制作ワークフローに組み込むことで、アナログ校正では見落とされがちな微妙な変化も、瞬時に検知・発見できる。

品質・効率や社内試験の成績などをポイントで評価し、それを社内的に公表するなどにも、各員の給与に反映させている。

同社を語るのも誇りに感じずるくらいに誇りにあふ、熱心で物欲、しかも明るい。そんな彼らの熱心さと勤勉さと明るさが、FAXWEBシステムへの信頼やDTPビジネスへの進出やXMLへの挑戦の成功の鍵なのだろう。

上司と部下の間であれ、発注者と受注者の間であれ、日本企業と中国企業の間であれ、相手を「人として大切にすること」からこそ同社が生まれたいという、当たり前だけれども忘れがちな真実が、ここには確かにあるようだ。

column

中国電子書籍の最新事情

中国における電子書籍端末の出荷量が、ここ1〜2年で世界の出荷量の2割を占めて、米国に次ぐ世界第2位の電子書籍販売市場となるだろうとされている。実際に中国の電子書籍を取り巻く状況はどうなるだろうか？ 大連英語の張氏に聞いた。 「日本同様にも多い盛り上がりがありますね。8月末に開かれた「北京ブックフェア」でも今年は電子書籍ゾーンコーナーができていましたし、リーダー端末は、中国国内メーカーが中心で、連江、文利和、翰林、台湾人々から出ますけど、やっぱり「連江」がメジャー。売れ筋は1,500円(約2万円)以内の製品で、なかでも連江のi30はすごく売れていると思いますよ。スマートフォンの普及はこれからですね。

それから、日本同様、中国もいま様々な電子書籍フォーマットが乱立している状態です。このところ、コンテンツの標準化など電子出版に関する国家規格を制定しようという動きがとてみ発覚、電子書籍フォーマットの標準規格は、北大方正の「CEBX」に設定されるのではとわれています。中国は国家が決めたところ、何でもそこは決まっています。何でもそこは決まっています。



エコーインテック代表取締役 大連英語技術株式会社 取締役 張立氏